



ジェンダーに関する女子中高生 調査報告書 2023

「女の子だから」という 言葉が与える影響



もくじ

はじめに	1
調査の概要と本報告書について	2
1 学校生活の中で感じていること	4
1-1 学校では平等なのか？	
1-2 学校は安心して過ごせる場所か？	
2 日常生活にある差別や暴力	10
2-1 インターネットは安全か？	
2-2 日常生活で感じる性差別	
3 カラダの不安 相談できる？	18
4 日英比較 少女たちに与える影響	24
4-1 コロナ禍が与えた影響	
4-2 自分には「できることがある」	
4-3 容姿に関する自信と不安	
4-4 スポーツに関する自信と不安	
女子中高生の意見	34
「調査結果から感じたこと」	
「変えたい、変わってほしいこと」	
考察	38
おわりに	39

はじめに

私たちの価値観や認識は、意識する・しないに関わらず、さまざまなものから構成されています。子どもたちは、生活の中心となる家庭や学校から、ジェンダーに関する価値観や規範を学び取っていきませんが、残念ながら私たちの周りにはまだまだ変えていかなければならない「女の子だから」という無意識の思い込み（アンコンシャスバイアス）があります。

ガールスカウト日本連盟は2019年からさまざまな年代を対象に、ジェンダーの意識に関する調査を継続しておこなっています。今回の調査は、過去に高校生年代を対象とした調査の結果と比較し、女子中高生が経験する「ジェンダーに基づく差別や暴力」の意識から少女たちが安心して過ごせる社会になっているのか、現状の把握と変化を検証しようと考えました。併せてガールガイド・イギリス連盟がおこなった同様の調査の結果を用い、海外と比較することで日本の女子中高生の現状を客観的に把握することも試みました。

また、今回はコロナ禍に関する調査項目を加え、社会の変化やパンデミックの不安が少女たちにどのような影響を及ぼしたのか海外比較を交えて検証しました。

2022年3月8日国際女性デーに、内閣総理大臣は「我が国の現状は、ジェンダーギャップ指数が世界第120位であることに表れているように、諸外国に比べて大変立ち遅れていると言わざるを得ません。こうした現状の背景には、男女間の賃金格差の存在や固定的な性別役割意識など、構造的な問題があると考えられます」とメッセージ¹を出しました。

近年、女性が働くことは当たり前になっており、新生活様式でリモートワークの導入が増えるなど働き方も多様になっています。しかし、いまだに男女の賃金格差があるのが現状です。令和4年賃金構造基本統計調査²の結果によると、一般労働者の男性を100としたときに、女性の賃金は75.7でした。コロナ禍においては、雇用打ち切りや無償ケア労働の増加により、働きたくても働けない状況に陥る女性もいました。³雇用の面ばかりではなく、女性へのDVの増加など、少女たちも少なからず影響を受けています。NHKが2022年におこなった調査⁴では多くの中高生がストレスや将来への不安を感じていることがわかりました。コロナ禍に少女たちは、どんな期待や不安を抱いていたのでしょうか。明るい未来は描けていたのでしょうか。

「すべての少女と女性が自分らしく生きられる社会」を目指し、一人ひとりがジェンダー平等について自分事として捉え、小さなことからでも行動していくことが重要です。小さな力が集まれば大きな力となり、確実に変化はおこると思っています。

- 1 「令和4年賃金構造基本統計調査の結果を公表します」2023/3/17、厚生労働省プレスリリース (<https://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/chingin/kouzou/z2022/dl/12.pdf>)
- 2 「男女間賃金格差について」2022/3/18、内閣府男女共同参画局 (<https://www.gender.go.jp/kaigi/renkei/kikaku/55/pdf/1.pdf>)
- 3 「コロナ下の女性への影響と課題に関する研究会報告書」2021/4/28、内閣府男女共同参画局 (https://www.gender.go.jp/kaigi/kento/covid-19/siryu/pdf/post_zuhyo.pdf)
- 4 「コロナ禍の不安やストレス、ネット社会の中高生」NHK『放送研究と調査』MAY2023より (https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20230501_5.pdf)

調査の概要と本報告書について

ジェンダーに関する女子中高生の声を把握し、現在の日本の状況を知ることを目的として調査を実施しました。主に以下の項目について広く社会に伝えるために本報告書にまとめます。

- 学校生活の中で感じていること
- 日常生活にある差別や暴力
- カラダについての不安を相談できるか
- コロナ禍が与える影響

ガールスカウト日本連盟の中高生年代の会員と一般の女子中高生を対象にウェブ上でアンケートをおこない、得られた回答を集計・分析し、調査結果としてまとめました。分析するにあたり、ガールスカウトが過去に実施した調査のデータやイギリスの調査データを用いて意識の変化や違いを見るなど、ガールスカウトのリソースを生かした比較も試みました。

アンケート集計後に、全国から中学生・高校生年代のガールスカウト10人がオンラインで集まり、調査の結果について意見交換をしながら身の回りで起きている現状を共有する機会を持ちました。そこで出た意見も本報告書に収録しています。

中学生を対象としたジェンダーに関する意識調査は数少ないため、今回は対象を女子中学生にも広げました。少女たちがアンケートに回答することにより、自分の身の回りに起きている違和感に気づき、学びを深めたり行動に移したりするきっかけとなるかもしれません。

少女たちの声は社会を写す鏡です。彼女たちの声一つひとつと、その声が生み出された社会のしくみや価値観の両面に注目すると、ジェンダー問題の構造に対する理解が進むのではないのでしょうか。ガールスカウトとしても女子中高生の声を把握することで、ここで得られたデータや分析結果を教育に生かし、よりよい社会の実現を目指した活動に取り組みながら社会へ発信していきます。

アイコン説明



調査に寄せられた声

本調査の回答は選択式と記述式があり、ここでは自由記述に寄せられた回答を掲載します。



過去のデータと比較

ガールスカウトが過去に実施した調査の結果と比較します。



女子中高生の意見

オンラインミーティング（右ページ参照）に参加した女子中高生から出た意見を掲載します。

【調査概要】

調査対象：全国の中学生・高校生年代の女子

調査期間：2023年11月14日～12月17日

調査方法：インターネット回答 全36問(小項目合計62問：選択44問、記述18問)

回答数：1,563人

中学生764人(ガールスカウト会員385・会員外379、男女共学709・女子校54)

高校生799人(ガールスカウト会員326・会員外473、男女共学619・女子校177)

【比較分析対象資料】

公益社団法人ガールスカウト日本連盟発行

『高校生が感じるジェンダーバイアス「ジェンダー」に関する女子高校生調査報告書 2019』

『「ジェンダー」に関する女子高校生調査報告書 2020 ～声をつなぐ～』

『「ジェンダー」に関する女子高校生調査報告書 2021 自分のからだ』

イギリス連盟 (Girlguiding UK)

『少女の意識調査2022 (Girls' Attitudes Survey) 』

【オンラインミーティングの実施】

参加者：ガールスカウトの中学生3人(静岡県、京都府、奈良県)

高校生7人(群馬県、埼玉県、福井県、愛知県)

計10人

- 設問は選択式のほか自由記述を含みます。掲載にあたり、自由記述形式の回答は一部表現を整えています。本旨を尊重しできるだけ反映するよう配慮しつつ、必要に応じて言葉の追加や要約しているものがあります。
- 数字の処理については小数点以下を四捨五入しています。合計数が必ずしも100%にならないことがあります。
- 複数回答の設問については、回答を人数表記のほか、相対割合でパーセント表示をしたものもあります。
- グラフでは、わかりやすさのため回答で「とてもそう思う、まあそう思う」を合計して「思う」とし、「あまりそう思わない、まったくそう思わない」を合計して「思わない」として表したものがあります。
- イギリスのデータについては、調査対象を7歳から21歳にしています。

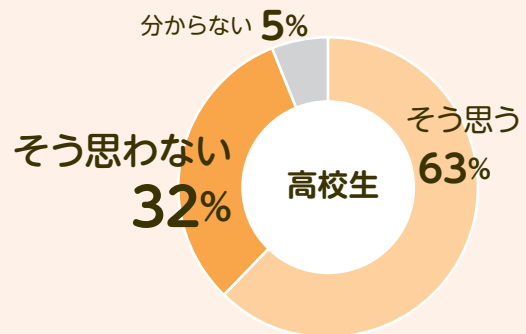
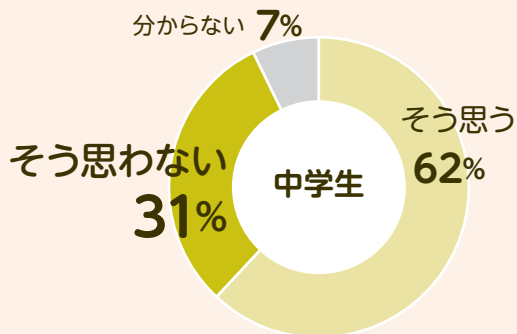
1 学校生活の中で 感じていること

学校では、伝える側に深い意図がなくても、生徒はさまざまな価値観や考え方を受け取っています。教師のちょっとした声のかけ方や接し方、教科書の挿絵、生徒同士の会話に至るまで、無意識のジェンダー規範が存在することを「隠れたカリキュラム」といい、その影響は深刻です。

ここでは教師の言葉や対応についての声のほか、友人や教師など多くの関わりを持ちながら過ごす学校生活において、女子中高生が感じている声を集めました。

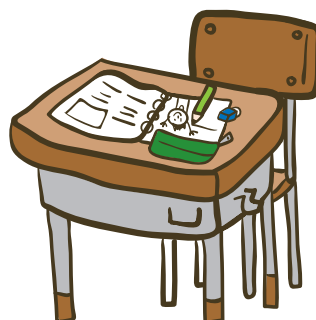
1-1 学校では平等なのか？

Q 学校の先生は、女子と男子に平等に接していると思いますか



そう思う=とてもそう思う、まあそう思うの合計
そう思わない=まったくそう思わない、あまりそう思わないの合計

※ [属性：女子校] の回答を除外しています。



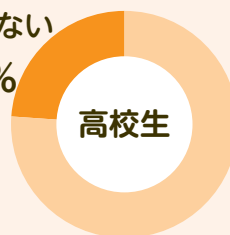


過去のデータと比較

この設問は、過去に男女共学の女子高校生を対象に調査したデータがあるので、同じく男女共学の数字で比較します。2020年の調査は高校生のみを対象としていました。

学校の先生は、女子と男子に平等に接している

そう思わない
23%



高校生

数字はガールスカウト日本連盟発行『「ジェンダー」に関する女子高校生調査報告書 2020 ～声をつなぐ～』より



2023年の高校生と比較すると、「そう思う」と回答している人が74%から63%に減少、「そう思わない」が23%から32%に増加しています。このことから、学校の先生の接し方に対して、ジェンダー平等の視点で見ることのできる高校生が増えていることが推察されます。その背景には、学習の中でジェンダー平等や包括的性教育等の機会が増えていることが挙げられると考えます。



調査に寄せられた声

「そう思う」

- 男子にも女子にも「ダメなことはダメ、いいことはいい」というごく普通の接し方をしていると思うから。(中学生)
- 男か女かではなく一人の人間として見てくれているから。(高校生)
- 委員会や係などは平等に扱っていると思う。(高校生)

「そう思わない」

- 名前の呼び方。男子は下の名前か「くん」付け。女子は「さん」付けが多い。(中学生)
- 怒り方などが女子には優しく男子に厳しくしている様子がよく見られる。(中学生)
- 力仕事を男子に任せたり、誰も発言しないとき男子に当てたりする。(高校生)
- 役割の面で少し大変なことがあると、先生が男子に協力を求める学校の風潮がある。(高校生)

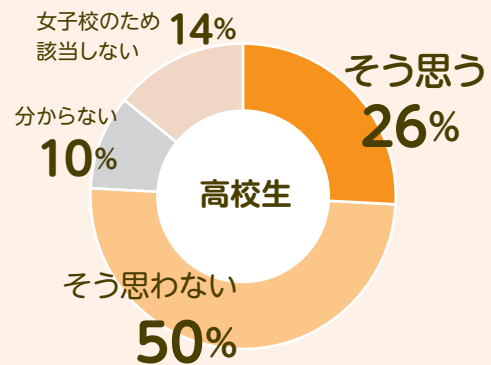
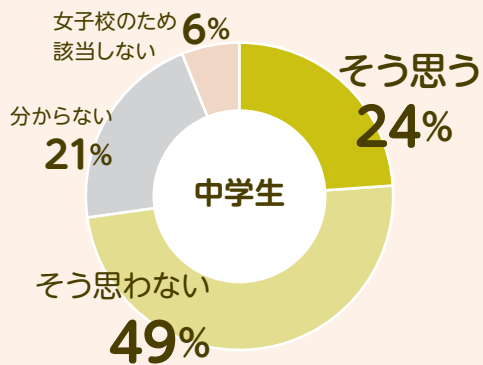


平等に接しているという回答の中には「区別しない先生が増えている」「役割が平等に与えられている」と感じている声が多く見られました。男女による対応の違いについては、特に高校生は進路の話に触れている回答も多く、理系でも文系でも関係なく進路を応援している先生が増えていると感じているようです。

平等ではないと感じている人の多くの意見に「怒り方・声のかけ方」、中学生は「女子にはやさしい、男子には厳しい」、高校生は「力仕事は男子に」という回答がいくつも見られました。



学校の先生は、役割や進路などに対して、
女子と男子に異なる対応をしていると思いますか



そう思う=とてもそう思う、まあそう思うの合計
そう思わない=まったくそう思わない、あまりそう思わないの合計

中学生24%・高校生26%が「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答しています。また中学生49%・高校生50%が「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と回答しています。「わからない」については、高校生10%に対し、中学生では約2倍の21%でした。



学校でもジェンダーに関する学習がおこなわれるようになり、「ジェンダー」という言葉を耳にする機会は増えています。一方、中学生は、普段接している学校の先生や友人など、ジェンダーに関する問題意識が自分事として結びついていなかったり、高校生に比べて行動範囲や触れる情報が限られたりなど、生活の中でジェンダーについて考える機会が十分にあるとは言えない状況にあると考えられます。



調査に寄せられた声

「そう思う」

- 自然に女性は医療や事務、男性は力仕事（工事関係）等といった偏見から進路を勧められたことがある。（中学生）
- 何か重いものを持ってくるとき、男子に頼んでいることが多い。（中学生）
- 男の子には重労働を、女の子には器用さを求めているように感じる。（高校生）
- 男子には理系寄りの話をし、女子には文系寄りの話をする先生がいる。（高校生）

「そう思わない」

- 私が先生に理系の学校に入りたいと言ったとき、応援すると言われたから。（中学生）
- 担任の先生は、生徒一人ひとりに丁寧に向き合っていて、生徒によって態度を変えたりはしない。（中学生）
- 性別に関係なく、個人に合った進路などを進めてくれていると感じるから（高校生）
- 男子だから、女子だから、という話をしない先生がほとんどだと感じる。（高校生）

日常で感じている「女の子だからしなくていい」

「女の子だから」何かをしなくていいと言われたことがある人は、中学生40%・高校生52%でした。中学生も高校生も、学校の先生に言われたことがある、という回答が一番多い結果となりました。

Q 「女の子だから」何かをしなくていいと言われたことはありますか

中学生

「ある」を選択した人は誰に制限を受けたり、期待されたりしましたか（複数回答）

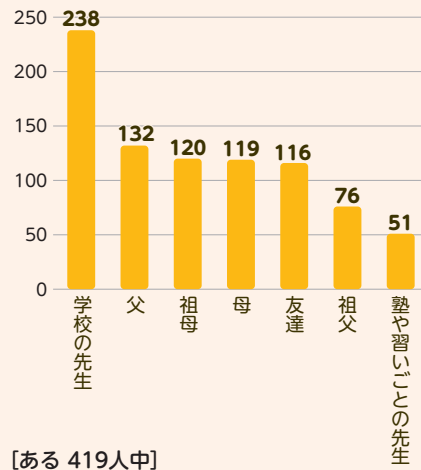
ある
40%



高校生

「ある」を選択した人は誰に制限を受けたり、期待されたりしましたか（複数回答）

ある
52%

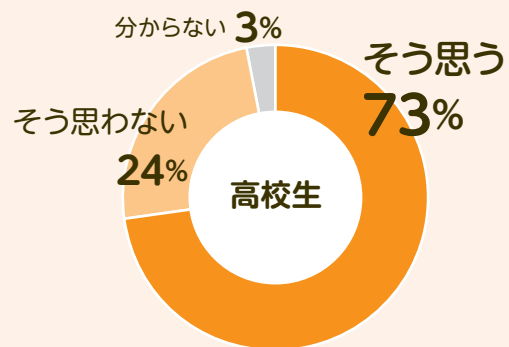
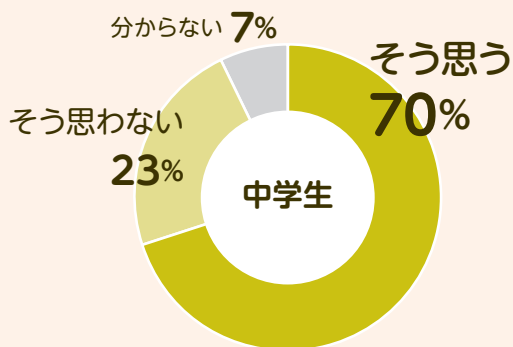


2019年度の調査では、「ある」と答えた高校生が47%だったので、5%もアップしたことが分かりました。「ある」と答えた人の自由回答では、「重たいものは男の子が持つ。女の子は持たなくて良い」という回答がほとんどでした。中には、「進路について女の子だから医者にはならない方が良い」「男子よりも女子の方が走る距離が短い」という回答がありました。自由回答の内容に、変化はあまり見られませんでした。



1-2 学校は安心して過ごせる場所か？

Q 学校は、安心して過ごせる環境だと思いますか



そう思う=とてもそう思う、まあそう思うの合計
そう思わない=まったくそう思わない、あまりそう思わないの合計

中学生、高校生ともに70%以上の回答が肯定的です。多くの女子中高生は学校が「安心して過ごせる」と感じていることがわかります。

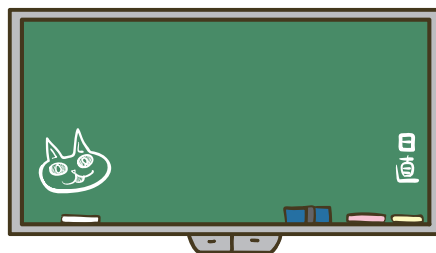
調査に寄せられた声

安心できる理由

- たのしいし、居心地がいいから。
- 友達がいる自分の居場所を感じられる。
- 私の学校はそれぞれの人の個性を尊重できる学校だ。

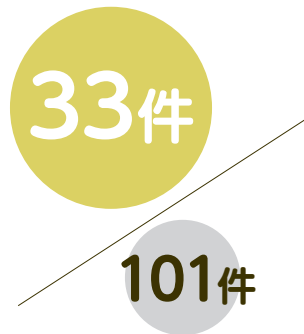
安心できない理由

- 法律より校則の方が厳しい。
- 先生を信頼できない。
- 常に周りに気を遣っていて精神的に疲れる。
- 友達にどう思われるか不安で取り繕うのに日々疲れる。

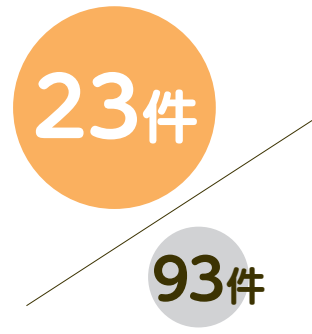


調査に寄せられた声のうち「友達」「友だち」「友人」の出現数

中学生



高校生



「とてもそう思う」「まあそう思う」の中には「友達」という言葉を含む回答が多く、中学生では101コメントのうち33件、高校生では93コメントのうち23件ありました。「友達」が、安心して過ごすことのできる大きな要因になっていると考えられます。

「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」のうち、半数以上の回答に「人間関係」に関する記述がありました。中学生は「常に人の目を気にしながら生活しなければならないから」「人に合わせないといけない」などのコメントがあり、高校生は「常に周りに気を遣っていて精神的に疲れる」「友達にどう思われるか不安で取り繕うのに毎日疲れる」などの回答が見られました。周囲の目を気にして自分を制限していることがわかります。

また「自分の着たい制服を着られない」「恋愛対象や性自認の固定観念が強い人が多く本当の自分を出せない」(中学生)、「スラックス導入が遅すぎた、髪を結ぶ、髪ゴム黒など好きな容姿を規則で認めてない」(高校生)という校則に関する回答も見られました。

学校における人間関係、多様な意見や個性を受け入れられる環境、学習に取り組める環境に関する記述が多く見られ、女子中高生にとってそれらが「安心して過ごせるか」の指標となっているようです。

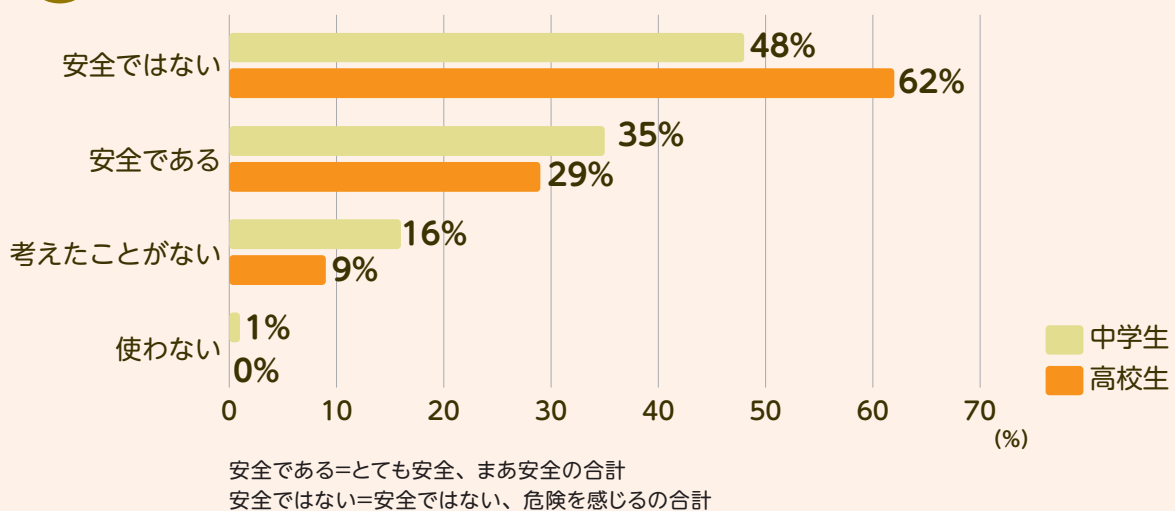


2 日常生活にある差別や暴力

2-1 インターネットは安全か？

日常生活の中で必要不可欠な存在となっているインターネットですが、情報を手軽に入手・共有できる一方、誤情報の拡散、プライバシーの侵害や悪用などの被害も発生しています。女子中高生たちは、インターネットについてどのように感じているのでしょうか。

Q インターネットを使うとき、あなたはどのように感じていますか



インターネットは「安全ではない」の回答が最も多く、高校生は62%・中学生は48%を占めました。そのうち高校生9%・中学生6%が「危険を感じる」と回答しています。安全性を疑い、さらには危険を感じながらも利用している実態がうかがえます。

一方で、「安全である」の回答は、高校生は29%・中学生は35%で、中学生の方が高校生よりも回答数がやや上回っていました。また「考えたことがない」という回答も見られました。

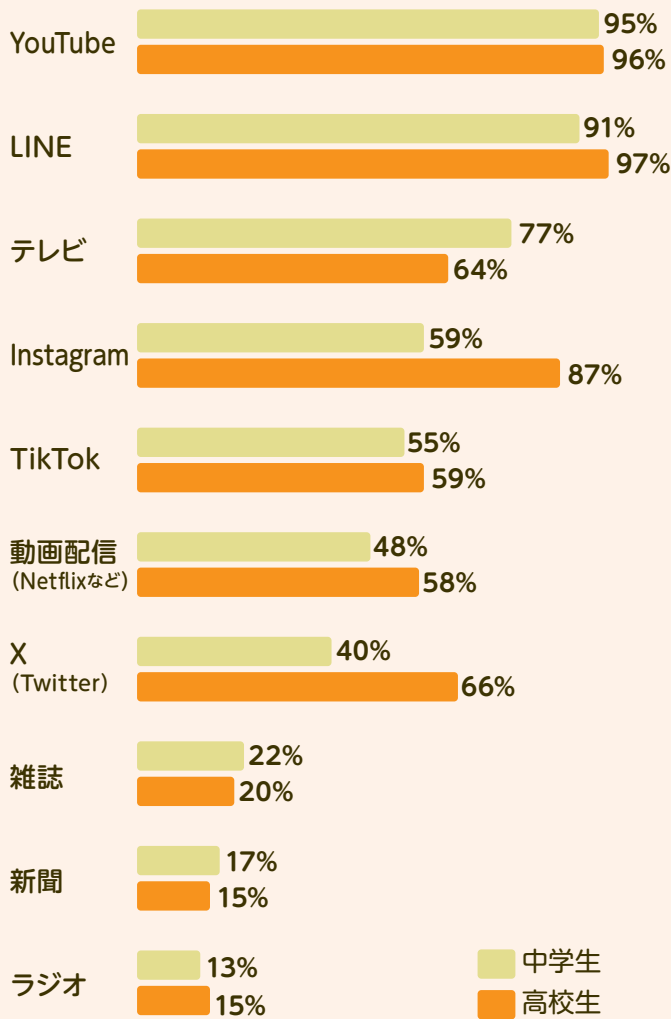
女子中高生の意見

- どの媒体が安心・安全に使えるのかがわからない。
- 安全ではないとわかっているけど、情報を得るところはインターネットしかない。
- ネットリテラシーを大事にしていかなければいけないと感じている。

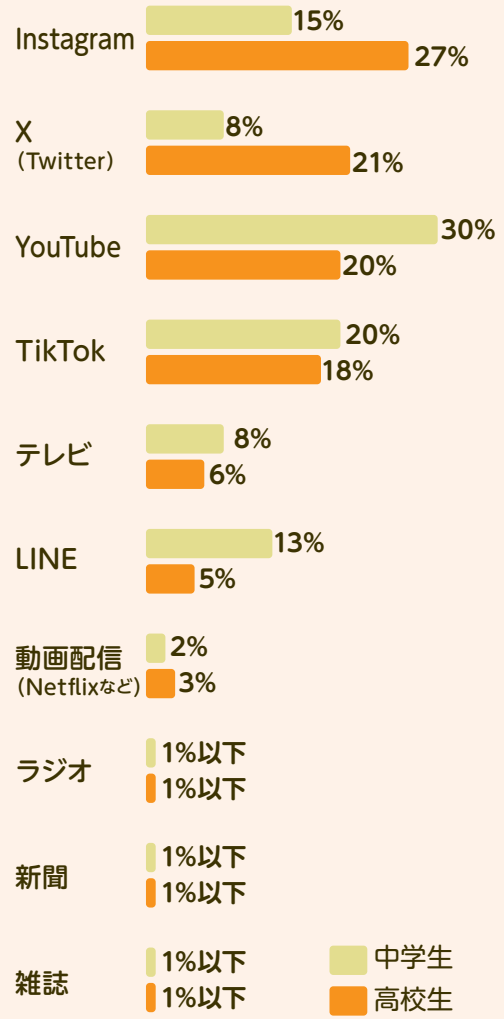




あなたがしているメディアを教えてください(複数回答)



最も影響を受けているメディアを教えてください(複数回答)



中学生も高校生も多岐にわたるメディアに触れ、情報を得ているようです。YouTubeとLINEにおいては、ほぼ100%に近い人が見ていて、今の中高生にとって、これらのメディアがいかに身近であるかがわかります。

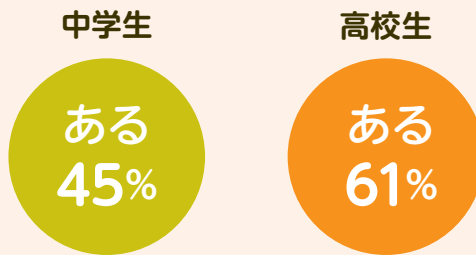
それにもかかわらず、ここから受け取る情報が正しいものなのか判断することが難しいという声も聞かれました。SNSでさまざまな被害やトラブルの事例も多く、その数は年々増えています⁵。使い方を一歩間違えると危険なものになってしまうことをきちんと理解をしたうえで、使用しなければいけないことを知る機会が必要です。

5 「インターネットトラブル事例集 2023年版」総務省資料
(https://www.soumu.go.jp/main_content/000872813.pdf)

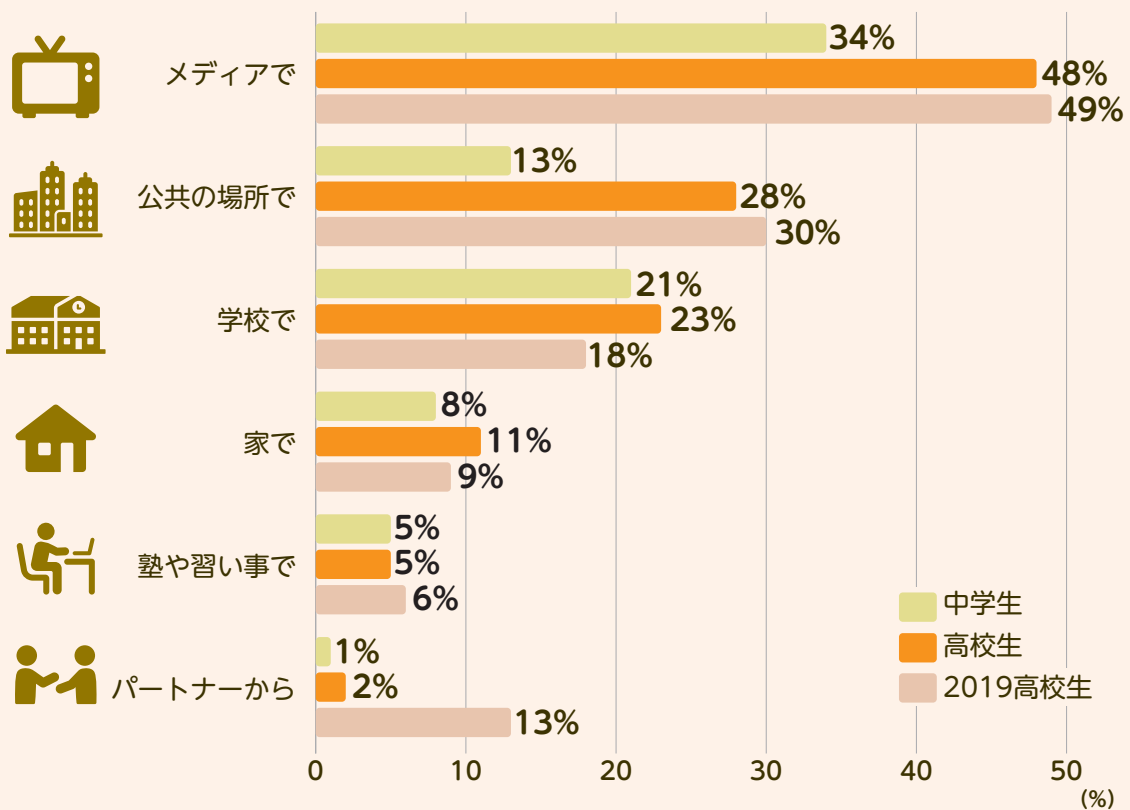
2-2 日常生活で感じる性差別

ここでは日常生活の場に視点を広げ、性的嫌がらせや性差別について女子中高生がどのように感じているかを見ていきます。

Q 普段の生活の次の場面で、性的な嫌がらせや性差別を見たりしていますか
(複数回答)



※ある=よくある、時々ある、たまにあるの合計



※比較のため各調査年の回答者数を分母としています。

過去のデータと比較

過去の高校生の数字を比較すると、「ある」と回答した人は、2019年高校生が62%、2023年高校生が61%で、あまり変化は見られませんでした。各項目で比較しても大きな変化はなく、日本の少女たちは日々の生活の中で多くの性的な嫌がらせや差別を目にしていることが分かります。

“メディアで”

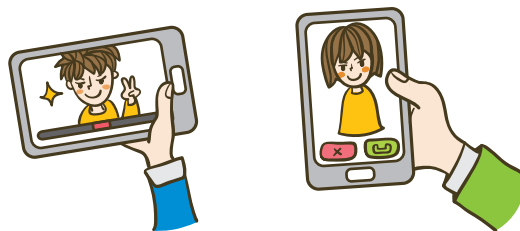
高校生の回答の中で最も声が多かったのは「メディア」の48%で、2019年とほぼ同じ数字で変化は見られませんでした。

「ニュースで」「SNSなどで」があげられ、中には「DVや性暴力の被害のニュースなどはたまに見ます」「職場などのセクハラ問題についてのニュース」「tiktokのコメント欄は匿名だから心無いコメントや性的なコメントが特に多い」「ある女優さんなどの投稿へのコメントに性的な表現を多く使ったコメント（妊娠、胸、など）で埋め尽くされている」などの回答がありました。

また「司会は男、飾りに女というのが目立つ」「女性アナウンサーが男性アナウンサーの助手的な立ち位置でニュースを進行していること」といった、未だに女性の役割が補佐的なものであるような風潮を指摘している高校生もいます。

女子中高生の意見

- SNSの広告はとても危険。
- 女性だとわかると、コメント内容が突然変わる
- SNSでは、いろいろな人とつながり、危険を感じる。DMで不適切で不快な思いをする写真などを送られたり、怖い思いをした。



“公共の場所で”

公共の場の中で最も多かった回答は「痴漢」で、これは2019年度の結果でも同様でした。

一方、中学生は高校生に比べて、公共の場で性的嫌がらせや性差別を経験したり見たりすることが少ない結果が出ています。これは中学生と高校生では行動範囲が異なるからかもしれません。

「電車で女性専用車両があり、とても混んでいるときでもその車両は空いているのに、男性は乗れない」という声がある一方で、「電車で痴漢にあったことがあるが、ある都市の電車には女性専用車両があり安心して乗ることができた」という声もありました。

女子中高生の意見

- 自分は経験したことがなかったので、友達が痴漢にあった話を聞いて衝撃を受けた。
- 量販店に行ったとき、男性にぶつかられておしりに手が当たった。でもそれが痴漢かどうか判断できず嫌な気持ちになった。

“学校で”

2019年と同様、学校生活で深刻な性的嫌がらせや性差別を受けたという声はあまりありませんでしたが、学校での下ネタトークや距離感が近いコミュニケーションを嫌がらせと感じている声があったり、先生が男女で違う声のかけ方をしたりするのが差別なのでは、という声は一定数ありました。



女子中高生の意見

- やはり長時間過ごす学校では、性的嫌がらせ、性に関する発言をよく聞く。
- 学校の先生は女子に厳しいだけでなく、男子に厳しく男子が辛い思いをしていることもあることがわかったので、嫌がらせの対象は女子だけではないんだと思いました。

“その他”

家やパートナーとの間にも、性的嫌がらせや差別はあると感じているようです。「家事はお母さんやお姉ちゃんがやってくれること」など家での役割を差別と感じたり、「父に女の子だからとよく言われる」「言葉遣いの強制」など親からの声かけに差別と感じたりする回答も見られました。



女子中高生の意見

- 家とかパートナーからとか、そういうのが中高生でもゼロじゃないことに、今ちょっと衝撃を受けています。悲しいなあって思いました。
- 安全であるべき家庭や学校でも、日常的に性被害を受けている人がいることを知り、なくしていかなければならないと強く感じた。

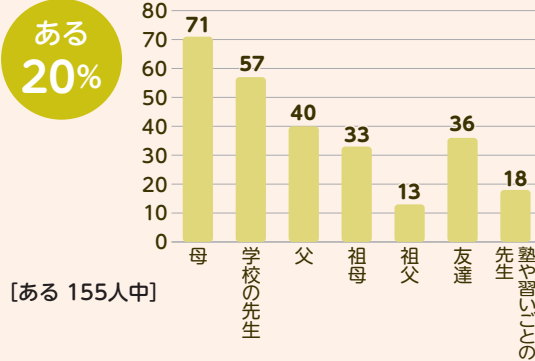


Q 女の子だからと何かを期待されたこと、やらされたことはありますか

「女の子だから」と何かをやらされたことはありますか

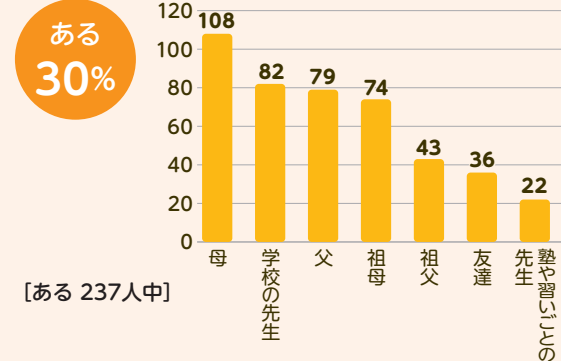
中学生

「ある」と答えた人は誰から制約を受けましたか
(複数回答)



高校生

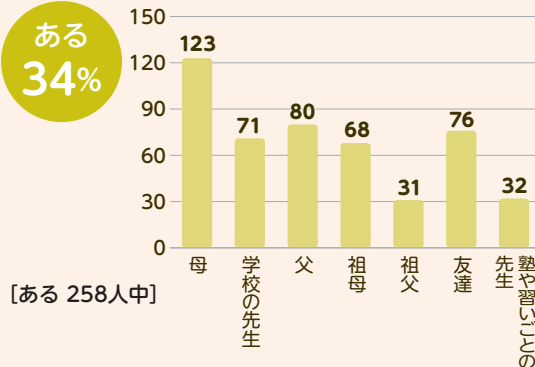
「ある」と答えた人は誰から制約を受けましたか
(複数回答)



「女の子だから」と何かを期待されたことはありますか

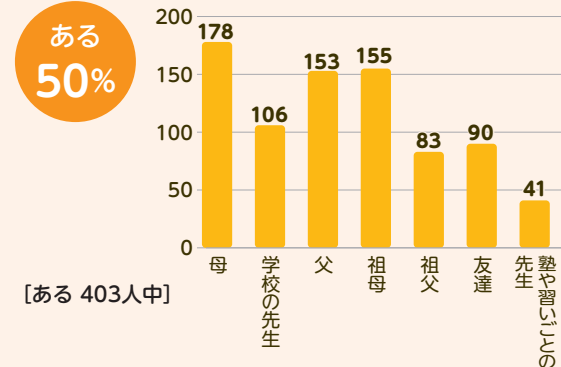
中学生

「ある」と答えた人は誰から期待されましたか
(複数回答)



高校生

「ある」と答えた人は誰から期待されましたか
(複数回答)



「女の子だから」と何かをやらされたことがあると回答した人は、中学生20%、高校生30%でした。2020年度の調査では高校生15%だったので、やらされたと感じる高校生が倍に増えています。中学生・高校生ともに、母親や学校の先生からやらされたと思うことが多く、高校生では、父親・祖母からやらされたと思うことが多くなっています。

自由記述の回答では、中学生は料理や掃除が一番多く、中には化粧という回答もありました。また作法などもあり、言葉遣いや着る服まで決められている気がするという回答もありました。

高校生も同様に、料理・掃除の他に細かいことを任された、ピアノやチャリーディングなど習い事の回答がありました。

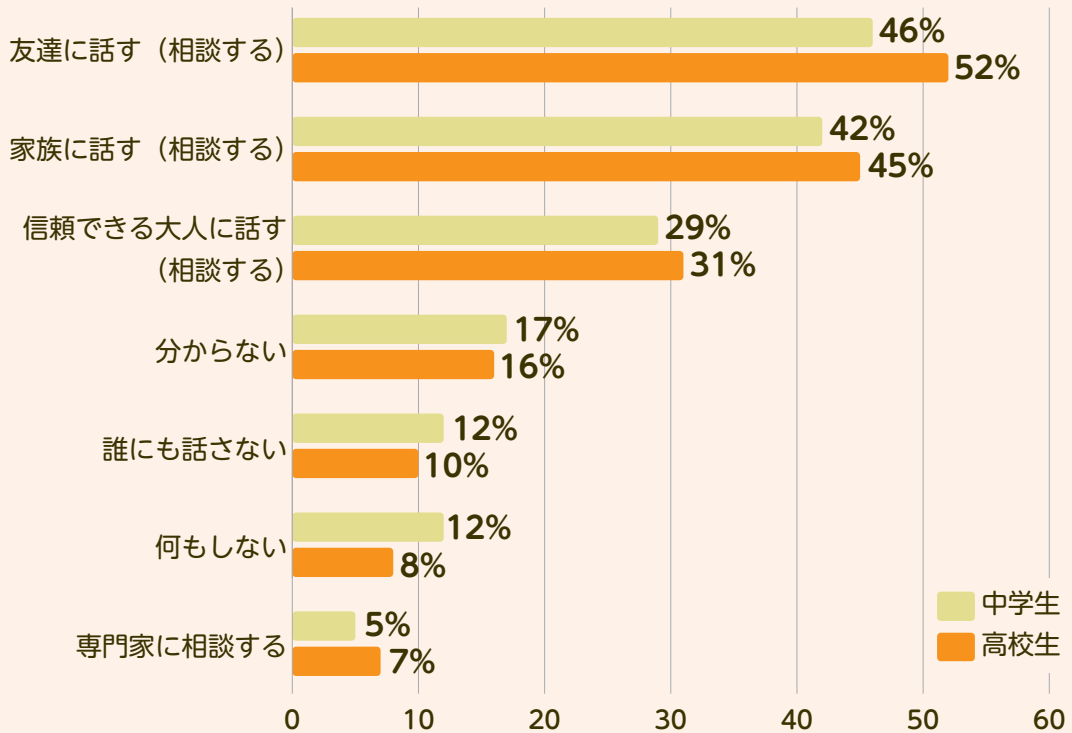
習い事に関しては「習わせてもらえた」という表現もあったので、女の子だからやらされたけど、良かったと思っていることも含んでいることが分かります。2020年度の調査でも家事などが回答として多く、変化はあまりないことが分かりました。

「女の子だから」と何かを期待されたことがあると回答した人は中学生34%、高校生50%でした。中学生・高校生ともに母親から期待されたことが多いことがわかりました。調査に寄せられた声には、家事全般、女の子らしく、可愛くいることを期待されていることが多く見られ、これは期待というよりは、「女の子だから、こうしなければならない」という固定観念をもって言われていることではないでしょうか。





性差別や暴力を見たり聞いたりしたとき、どうしますか（複数回答）



中高生ともに「友達に話す（相談する）」という回答が一番多く、次に「家族」、その次に「信頼できる人」と続きました。気になるのは「誰にも話さない」「何もしない」という回答が、合わせて中学生24%、高校生18%もいることです。

また「わからない」と回答している中学生17%・高校生も16%おり、性差別や暴力を見たり聞いたりしたときに、どのように対応したらよいか、声にあげる方法はどのようなものがあるのか、などについて考える機会が必要です。



イギリス連盟の調査では、次の結果が出ています。

「少女たちがどこで性的な嫌がらせや性差別を目にしているのか」

- オンライン 80%
- メディア 73%
- 公共の場 68%
- 学校 66%
- 政治 63%
- スポーツ 58%

このような現状を受け、国も取り組みを始めています。

文部科学省が推進する「生命(いのち)の安全教育」は、命の尊さを学び、性暴力の根底にある誤った認識や行動や、性暴力が及ぼす影響などを正しく理解したうえで、命を大切にする考えや自分や相手、一人ひとりを尊重する態度などを発達段階に応じて身に付けることを目指しています。

2021年から段階的にスタートし2023年から本格的に全国の小中高校で導入されています。

指導者の手引きをはじめ各種教材が用意され、相談できる場所なども明記されるなど、性犯罪・性暴力を防ぎ、子どもたちを性暴力の被害者にも加害者にもしないための教育です。

文部科学省と内閣府が連携し作成した生命(いのち)の安全教育
(https://www.mext.go.jp/a_menu/danjo/anzen/index2.html)



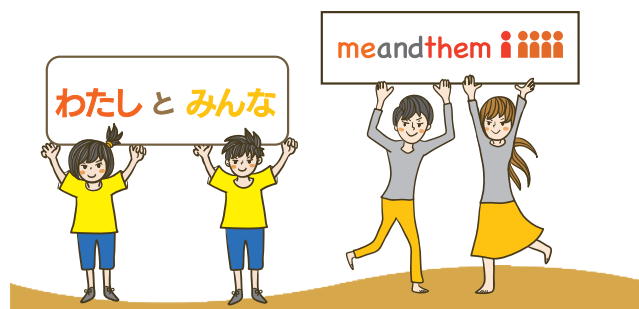
ガールスカウト日本連盟でも2021年からオンラインプログラムをスタートしました。

SDGs目標5ジェンダー平等の実現に向けて、性別役割に関すること、自分の未来を描くこと、安全に関することなどを学びます。特に、自分や身の周りの人が危険に直面した時、被害にあった人は悪くないこと、相談できる人がいるということを知っておくことはとても大切です。

- ガールスカウト日本連盟が作成したオンラインプログラム
(対象：小学生～大人)
<https://www.girlscout.or.jp/meandthem01/>



- 内閣府とガールスカウト日本連盟が協働し作成したオンラインプログラム
(対象：中学生～大人)
<https://www.girlscout.or.jp/meandthem/>



3 カラダの不安 相談できる？

女子中高生たちは、自分のカラダについて安心して周囲に相談できるのでしょうか。また、そのような環境になっているのでしょうか？

ガールスカウトが2021年に実施した調査の設問に類似の項目があるので、今回の結果と比較します。

Q 自分の生理や体調について誰かと話しますか（複数回答）

2023年			2021年	
	高校生	中学生	高校生	
1位 友人	43%	44%	1位 友人	41%
2位 家族	37%	40%	2位 家族	24%
3位 誰とも話さない 誰とも話せない	10%	9%	3位 SNS	15%
			⋮	
			6位 相談しない	3%



※2021年と2023年の調査では選択肢が異なります。

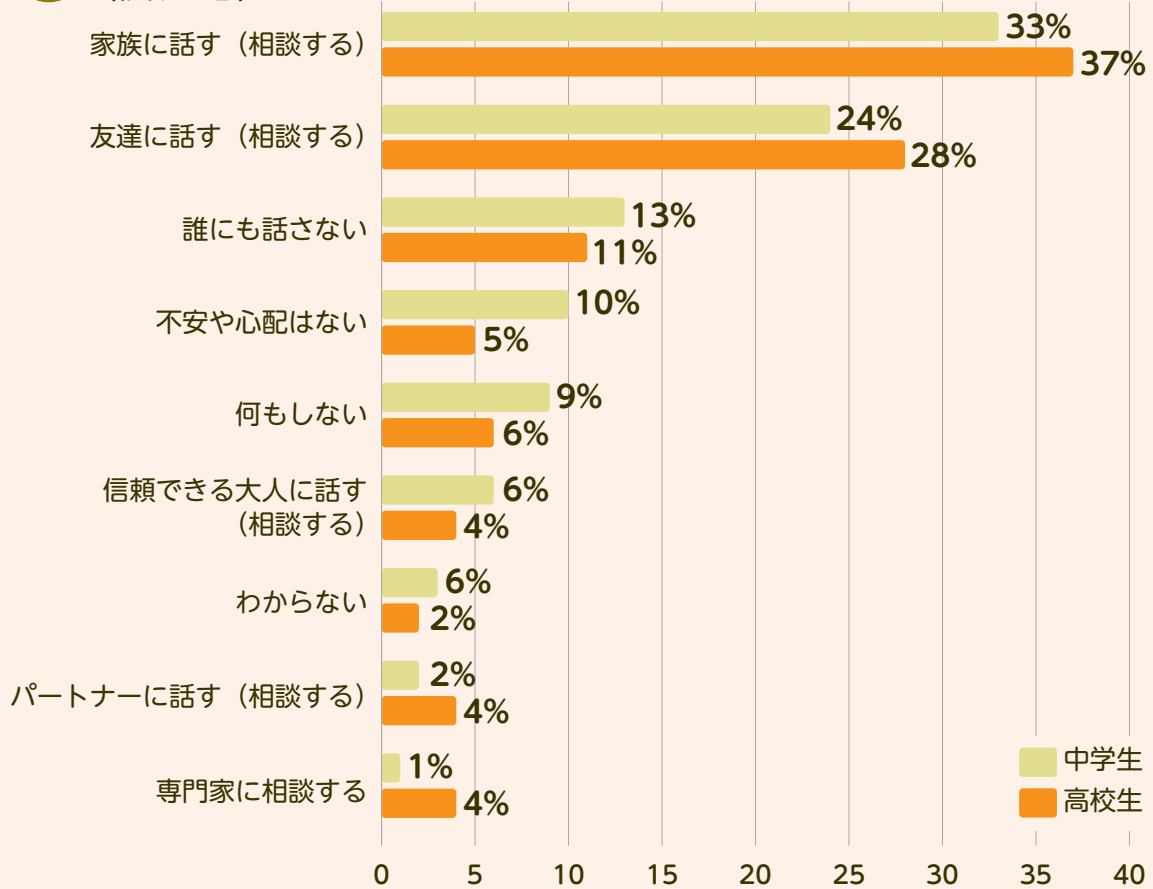
最も多い回答は「友人と話す」で、高校生43%、中学生44%、次いで「家族と話す」が高校生37%、中学生40%でした。この順位は2021年に女子高校生を対象に調査した時の結果と変化はありませんでしたが、家族と話す割合が増えたことは意識の変化があったと捉えてよいのではないのでしょうか。

2023年の調査では、3位に「誰とも話さない」「誰とも話せない」がランクインしていて、女子中高生のおよそ一割がそのように思っていることがわかります。

なお、2021年の調査の時は選択肢が異なり、SNSが第3位でした。



あなたは、自分のカラダのことで「不安や心配があるとき」どうしますか
(複数回答)



中学生で最も多い回答は「家族に話す」の33%、次いで「友達に話す」の24%でした。高校生でも同じく最も多い回答は「家族に話す」で37%、次いで「友達に話す」で28%でした。中学生、高校生ともに「家族と話す」が最も多い結果となりました。

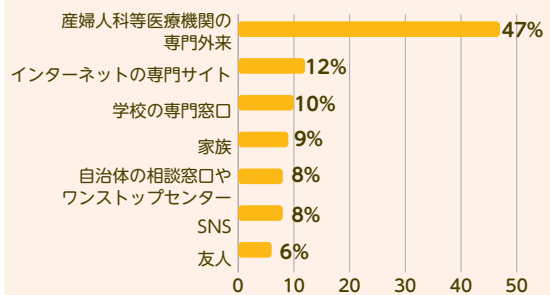
一方で「誰にも話さない」「何もしない」という回答も目立ちました。不安や心配を抱えているにも関わらず、相談しない・できない人が多くいることがわかります。不安や心配があるとき、周囲には複数の相談できる人がいることや相談できる機関があることを伝えていく必要があります。



過去のデータと比較

2021年の調査で「性の健康の問題をあなたが解決しようとする場合、どのようなサポートが必要であると思いますか」という質問をしたところ、47%が産婦人科等医療機関の専門外来、12%がインターネットの専門サイト、10%が学校の専門外来と回答しました。専門的なサポートを必要とする人が多い中、「専門家に相談する」と回答した人は少数で、実際に正しい知識を持つ人に相談できている人は少ないという結果でした。

性の健康の問題をあなたが解決しようとする場合、どのようなサポートが必要であると思いますか



2023年にガールスカウトが全国の中学生年代の会員を対象としておこなった自分のカラダを知るためのプログラムでは、生理について、このような声がありました。

- 自分が知らなかったことが多くて、例えば私はまだ生理が始まってないけれど、生理がきたらどう対処すればいいか分かりました。
- 生理痛でつらいとき、薬を飲んででも良いことを知った。
- 痛みがないと飲んではいけないと思っていたが痛くなる前に薬を飲むことを知った。
- 生理のことで心配だったことも知ることで安心できました。
- 生理のときにイライラしちゃいけないと思ったけれど、講義を聞いてイライラしても大丈夫と思った。
- 生理中のことについて、「お風呂に浸かっても良い」だとか、自分の思っていた過ごし方とは違って、何だかもっと自由にしていいのかな、と感じるところがありました。

生理について正しい知識を学ぶ機会を設けることで、生理についての不安が安心に変わったという声があり、教育の必要性を感じます。

日常で感じている「生理による不公平・不平等」

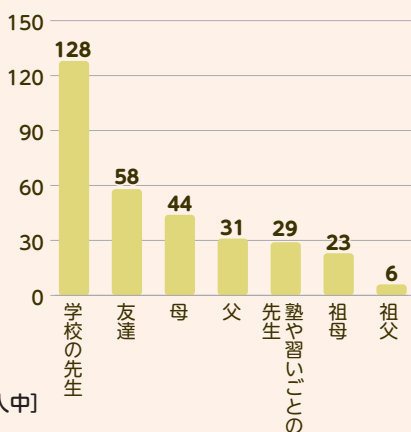
「女の子だから」と不公平や不平等を感じたことはありますかという質問に対し、不公平や不平等と感じた回答は、中学生34%、高校生43%でした。自由記述の回答の中で、中学生・高校生ともに目についたのが生理に関するもので、生理で行動が制限されることなどの回答がありました。

Q 「女の子だから」と不公平や不平等を感じたことはありますか

中学生

ある
34%

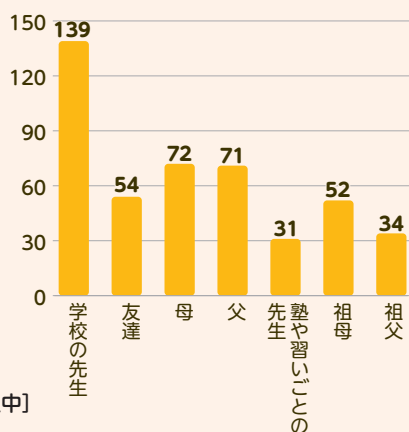
「ある」を選択した人は誰に制限を受けたり、期待されましたか（複数回答）



高校生

ある
43%

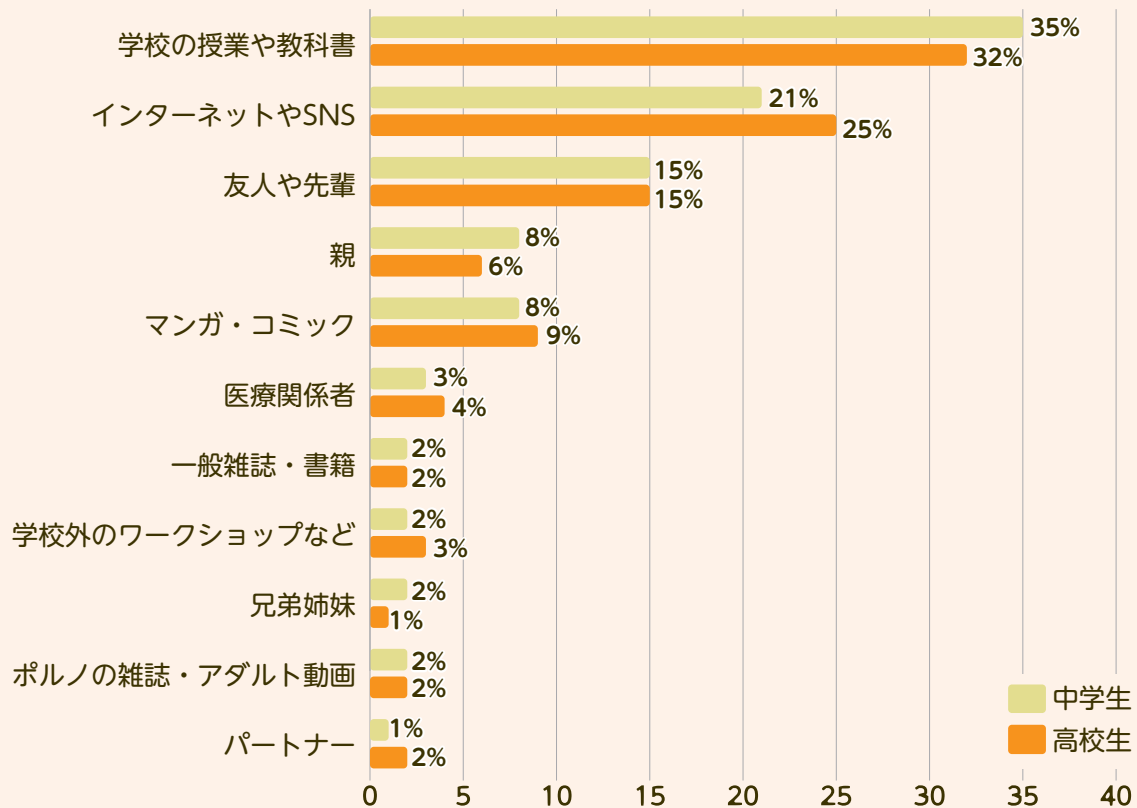
「ある」を選択した人は誰に制限を受けたり、期待されましたか（複数回答）



2020年度の調査に寄せられた回答と大きな変化はありませんが、2023年度は「生理」によって行動が制限されることを回答した人が多いのが特徴的でした。これは「生理のことを周囲に対して口に出せるようになった」「社会的にも学校社会においても、生理のことをきっちり捉えることができるようになった」と言えるのではないかと考えられます。



Q あなたは性に関する情報をどこから得ていますか（複数回答）



中高生共に最も多い回答は「学校の授業や教科書」で、中学生35%・高校生32%でした。次いで「インターネットやSNS」で、中学生21%・高校生25%という結果でした。過去の調査でも結果はほぼ同じでした。



インターネットやSNSは「性に関する情報の情報源」として多くの割合を占めています。便利で身近な存在であることから安易に検索してしまいがちですが、正しい情報を見極めるのは難しく、情報を受ける側と発信する側、双方の問題があります。

このような現状においては、正しい知識を得る環境が整っている学校での性教育がより重要になってくるのではないかと考えます。また、正しい知識が得られるインターネット上の情報源や正しい情報を判断できるリテラシーを高める必要があります。

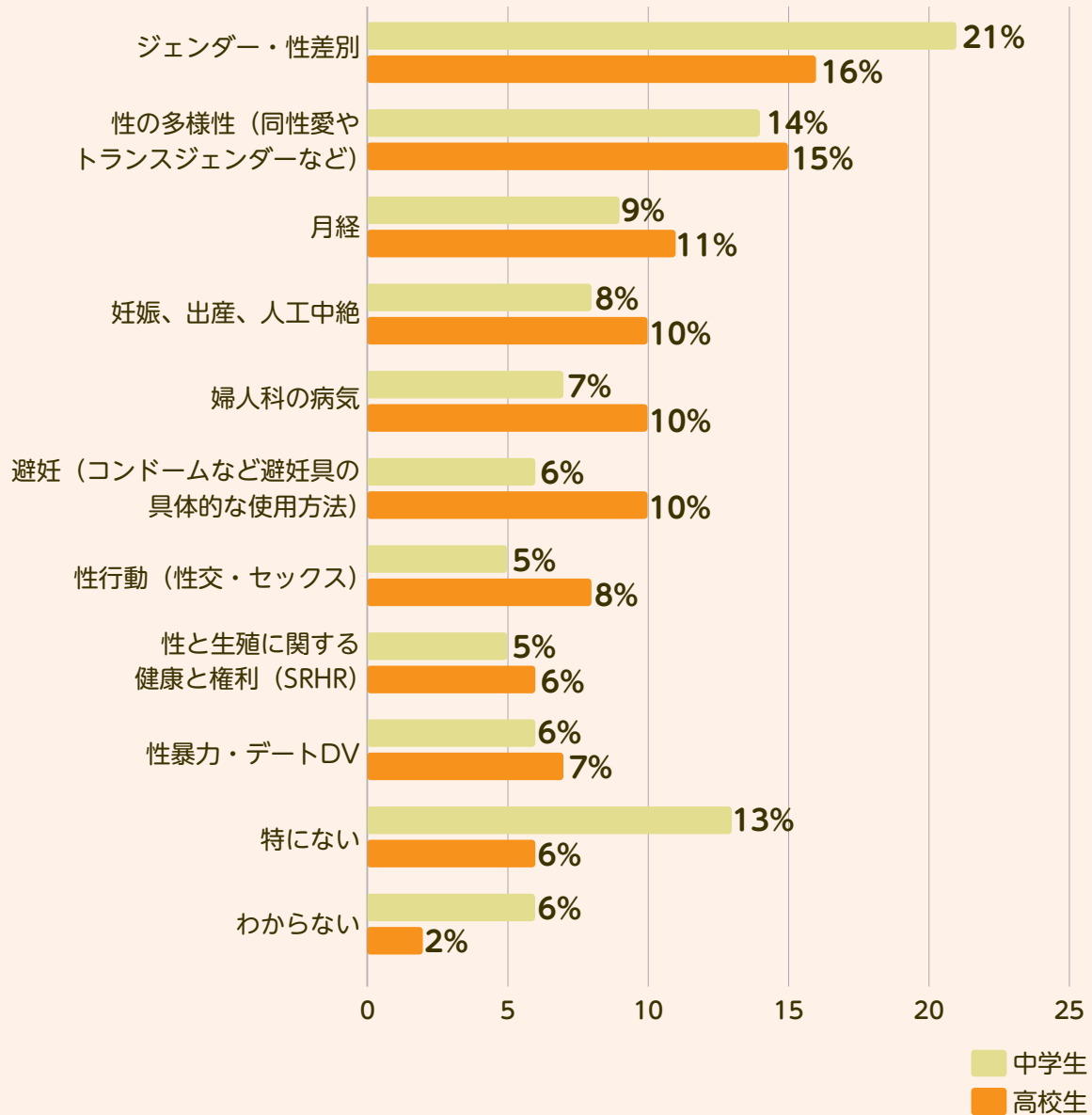


女子中高生の意見

- 学校の教材では自分の身を守る情報が少ない。
- インターネットでは、正しい情報が分からない。
- インターネットは危ないということは分かっていても、情報を得るところがないから、仕方ないのかもしれない。
- 医療従事者など専門家が正しいことをSNSに出して欲しい。
- SNSの情報は正しいことばかりではないということを知ることが大切。正確な情報を出してくれるサイトがあればいい(文科省など)。



性に関する教育で詳しく知りたいものは何ですか（複数回答）



中高生共に最も多い回答は「ジェンダー・性差別」で、中学生21%・高校生16%、次いで「性の多様性（同性愛やトランスジェンダーなど）」が中学生14%・高校生15%という結果でした。



中高生共に月経や妊娠、出産、人工中絶また婦人科の病気についても詳しく知りたいと思う一方、高校生は中学生と比べ「性行動（性交・セックス）」「避妊（コンドームなど避妊具の具体的な使用方法）」と回答した割合が増えていることが分かりました。また、中学生は高校生と比べ「特にない」という回答が多く、中学生の性教育への関心が低いのではないかと考えられます。

カラダの不安を相談しやすい環境に

今回、「自分のカラダのことで不安や心配があるとき」に「誰とも話さない、話せない」と回答した人が一定数見られました。日本では、カラダのことについて相談したいことがあっても、相談しやすい環境が不十分であることや、相談すること自体のハードルが高いと感じる人が未だに多い現状があります。



性に関する情報源は、学校の性教育の次に「インターネットやSNS」が多くを占めており、相談しにくいことや相談できない不安を、インターネット上で解決しようとする人が多いのではないかと考えられます。

婦人科や専門窓口相談することに抵抗がある人がいる現状をふまえ、インターネット上に正しい知識を得られる情報源を整備することや、実際に専門的なサポートにアクセスしやすい環境を整えることが求められます。

また、より広く包括的性教育をおこなうことで、性に関する相談へのハードルを下げること、そして相談できる場所があることを伝えることが重要です。

包括的性教育

ジェンダー平等や性の多様性を含む人権尊重を基盤とした性教育のこと。包括的性教育の目的は、性に関することのみでなく次のことを学ぶこととしている。

- 生涯を通して自らの権利を守ることの大切さを知ることと知識や態度等を身に付けさせること
- 自らの健康・幸福のための選択を自分で決められるようになること
- 多様性を認め、個々を尊重すること
- 人間関係を構築することの大切さ、個々の選択が自己や他者に与える影響への気づきを得ること

(公益財団法人日本女性学習財団ウェブサイト「キーワード・用語解説」参照)

国際セクシュアリティ教育ガイダンス

学校内外における包括的性教育のプログラム教材を開発し実践することを手助けするためにユネスコにより作成されたもの。科学的根拠に基づき、各地域の実情に合わせた心情や価値観・態度・スキルなどの要因を考慮しながら働きかけるために、理論的に設計されたプログラムの必要性を強調している。併せてすべての人が健康で幸福となれるよう、数多くの国際的な人権に関する文書を基盤として作られている。

子どもや若者が自らの健康や幸福となる権利を知るとともに、他者を理解し権利を尊重することができるよう、5～18歳程度の若者を対象に、キーコンセプト、トピック、学習目標に分けて書かれている。

キーコンセプトは以下の8項目で構成され、初等教育・中等教育レベルの4つの年齢グループに分けて学習目標が設定されている。

1. 人間関係
2. 価値観、人権、文化、セクシュアリティ
3. ジェンダーの理解
4. 暴力と安全確保
5. 健康と幸福（ウェルビーイング）のためのスキル
6. 人間のからだと発達
7. セクシュアリティと性的行動
8. 性と生殖に関する健康



国際セクシュアリティ教育ガイダンス
【改訂版】
科学的根拠に基づいたアプローチ
(明石書店発行)

4 日英比較 少女たちに与える影響

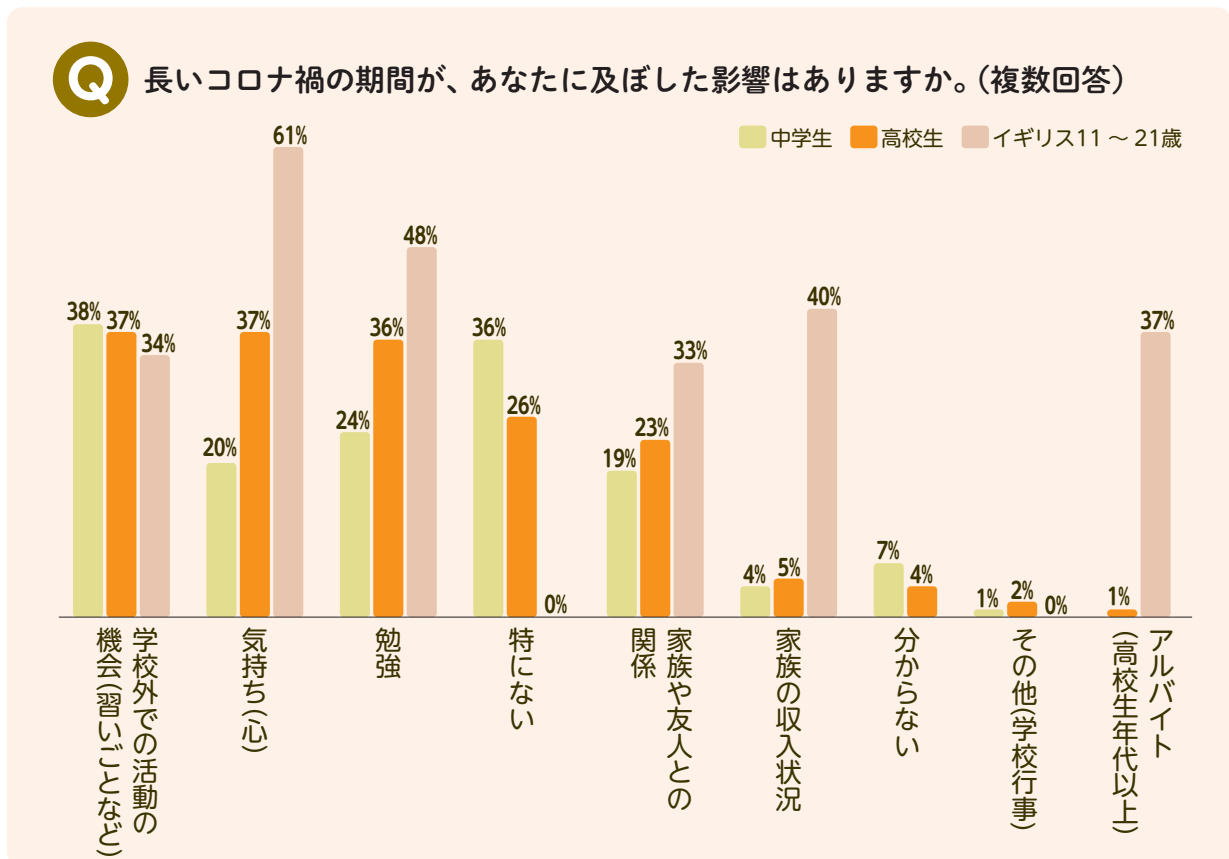
イギリスのガールスカウトは15年前から、毎年「女子の意識調査」を実施しています。その報告からは少女と若い女性が、日常生活で直面しているプレッシャーや、関心のある問題についてどのように感じているかがうかがえます。

今回、2022年にイギリス連盟が実施した調査報告⁶より、いくつかの項目について比較しました。

6 「GIRLS' ATTITUDES SURVEY 2022」
(<https://girlguiding.foleon.com/girls-attitudes-survey/2022-report/>)

4-1 コロナ禍が与えた影響

コロナ禍の暮らしは少女と女性にどのような影響を与えたのかを明らかにするため、コロナ禍について質問しました。イギリス連盟がおこなった調査にも同じ質問があるのでグラフで比較します。



※日本連盟の調査対象は女子中高生(12歳～18歳)、イギリス連盟はこの設問については11歳～21歳の少女と女性を対象にしています。

日本の女子中高生のトップ3は、「学校外での活動の機会」「勉強」「気持ち(心)」でした。その背景としては、コロナ期間中は休校措置、自宅待機措置がなされ、本来の学校生活を送ることが困難であったことが考えられます。また家にこもる生活や人と会うことがままならない状況下だったため、気持ち(心)に溝ができた、さびしい思いをした人が多いこともわかります。一方で、影響については「特にない」という回答も一定数ありました。

イギリスでは61%の少女と女性が、コロナ禍はメンタルヘルスすなわち心の健康に悪影響を及ぼしたと答えています。そのうちの58%が11歳から16歳、39%が17歳から21歳でした。他には学校生活、学習、仕事の機会に影響があったとの回答もありました。また、コロナ禍が家計の収入や仕事にも影響することを心配する声もありました。

日英の回答からは、両国ともにメンタルヘルス(心)、学校、学習(勉強)に影響があったことがわかります。イギリスではロックダウン(都市封鎖)、日本では外出自粛(ステイホーム)期間があり、人と会うことができず学校にも行けない日々が続きました。日英とも同じような状況下だったため、似たような結果になったと考えます。コロナ禍での状況については、さまざまな影響はあるものの、一人で過ごす時間の価値に気づいたという声もありました。

調査に寄せられた声

- 成績が上がった(中学生)
- 一番仲が良い友達ができ(中学生)
- 気持ちにゆとりができた。(高校生)
- 自分が何をしたいのか、ちゃんと向き合えた。(高校生)
- ネガティブな考えになることが増えた(高校生)
- 人前で堂々と話すことができなくなった(高校生)
- マスクをつけるのが当たり前になってしまったため、外すタイミングが分からない(中学生)



4-2 自分には「できることがある」

Q あなたはこれができると自信を持っていることはありますか？

ある



日本の女子中学生75%・高校生68%が自信を持っていることがわかりました。

イギリスの調査では、7歳～21歳の少女と女性の73%が自分には「これができる」と自分に自信を持っていて、78%は自分の資質に対して自信を持っているという結果が出ています。しかし、中学校に進学すると同時に自信を持つ人が減っていると記されており、自信や幸せの感じ方は地域性があることもわかりました。

日英ともに、年齢が上がるにつれて自信を持つ人が減っているようです。



4-3 容姿に関する自信と不安

Q あなたは、容姿へのプレッシャーを感じることがありますか

感じる



感じる=とても感じる、感じるの合計

日本の女子中高生が自分の容姿へのプレッシャーを感じていることへの回答は、中学生59%・高校生69%で、自分の容姿に自信を持っていない日本の女子中高生は全体の半数以上であるという結果が出ています。一方でイギリスは、どちらの年代もほとんど差はなく、割合は50%と、日本の女子中高生よりも少ない結果が出ています。

なお、イギリスの調査では、「外見によるプレッシャーは特に年を重ねるごとに現実的な課題と感じ、より外見のことを気にするようになる」と記されており、17歳～21歳の女性においては、「自分の容姿に自信を持っている」と回答したのはたった10%で、36%は自分の写真を加工なしでSNSに投稿することに抵抗を感じています。



容姿のプレッシャーを感じる人が多いのは、私たちを取り巻く社会の中で、偏った容姿のイメージを発信しているメディアの影響が考えられます。



女子中高生の意見

- 耳が大きいとか、容姿に対しての価値観が女性是这样であるべきという風になっていて、それもある種の性被害なのではと思う。
- SNSでインフルエンサーが、「可愛くならなきゃ」とか、「このスタイルにならなきゃ」など発信していて、SNSがあるからこそプレッシャーがかかっている気もする。

4-4 スポーツに関する自信と不安

Q スポーツをすることについて自信が持てなかったり、不安を感じたりすることはありますか

ある



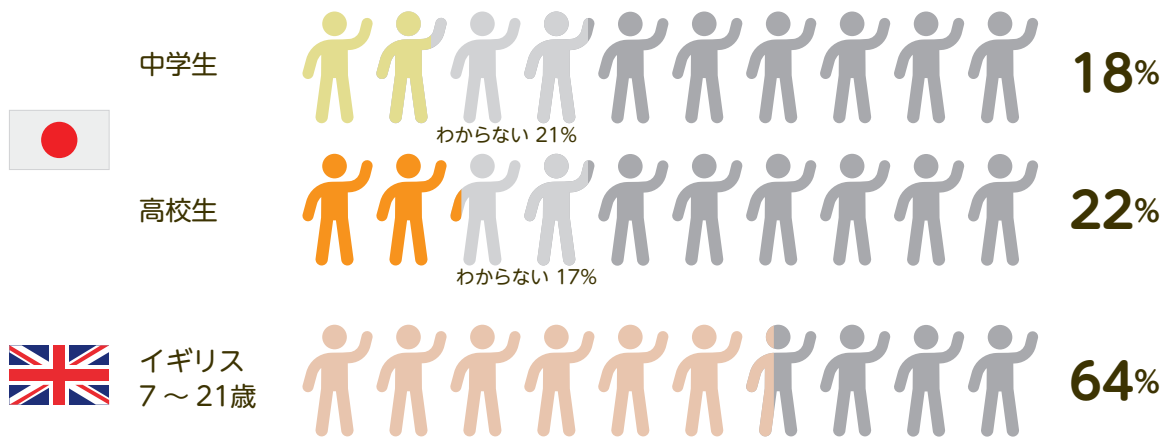
スポーツをすることについて「自信が持てなかったり、不安を感じることはありますか」という質問に対して、日本の女子中学生48%・高校生49%が、「ある」と回答しました。

その理由で一番多かったのは「自信がないから」で、次に「他者からの評価」や「他者と比較をして不安を感じている」という意見がありました。また少数ではありますが、「ケガをすることに対する不安」や「自身の外見が気になり、スポーツをすることに不安」を感じている少女もいることが分かりました。生理などといった女性の特性によってスポーツすることに不安を感じるという意見もありました。

イギリスでの調査においても、42%の少女たちがスポーツをするにあたって「不安」と感じると回答しています。

男女でスポーツをする機会が平等に与えられていると思いますか

与えられていない



※イギリスの調査に「わからない」の選択肢はありません。

日本の女子中学生61%・高校生62%が男女でスポーツをする機会を平等に与えられていると回答した一方、中学生18%・高校生22%が平等に機会が「与えられていない」と回答しています。体育の授業で、男子と女子で走る距離が異なる、入部できる部活が異なるという意見がありました。「わからない」という回答は中学生21%・高校生17%でした。

イギリスの調査では少女と女性(7歳～21歳)の64%は、男性と女性がともにスポーツや運動で平等に機会を与えられるべきだと考えています。

また21%の少女と女性(11歳～21歳)が、男性にしかできないとされているスポーツがあると回答しました。



Q 女子がスポーツをするとき、バリア（障害）になるものはありますか

ある



中学生



高校生

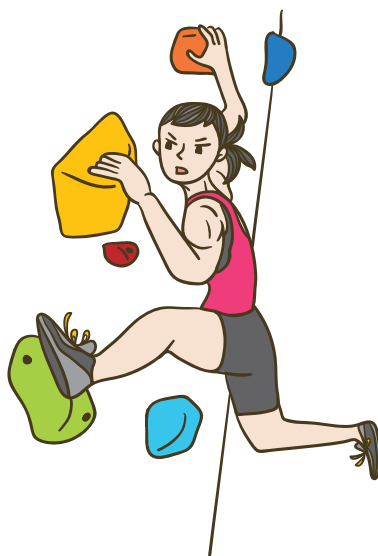


イギリス
※ロンドン、
イギリス南部
11～21歳



イギリスでは、スポーツをするにあたって、「不安」というバリア（障害）を抱える少女が多くいます。ロンドンでは、バリアがあるという回答をした少女の中で36%が不安を感じていることがわかりました。

日本でも、スポーツをするにあたって壁となるものがあると答えた女子中高生が多く、中学生では42%、高校生では半数を超える56%となりました。



Q スポーツの世界では、男子が良い成績を取ると女子チームよりも祝福されたり注目されると思いますか

そう思う



そう思う=とてもそう思う、まあそう思うの合計

日本の女子中学生48%・高校生52%が男性の方が「注目される」と回答しています。イギリスでは57%の少女が、女性の団体スポーツよりも男性の団体スポーツの方が祝われることに不公平を感じています。

今回のイギリスの少女と日本の少女との比較においては、ほとんどの回答について大きな差は見られませんが、両国ともに少女たちがスポーツにおいて男女間に不平等がある、不安や壁を感じていることが分かりました。



女性がおこなうスポーツについては、日本ではメディアが取り上げることが男性より少ない現状があります。東京オリンピック開催時は、国際オリンピック協会が「スポーツにおけるジェンダー平等、公平でインクルーシブな描写のための表象ガイドライン」⁷を作成し、平等に報じるようにメディアに公表していますが、それ以外の場面では日本国内においては特にガイドラインが制定されていません。NHKが2021年にとりおこなった調査⁸においても、スポーツ分野におけるテレビでの取り扱い、男性が女性の約3倍以上となっています。

これを見てもわかるように、スポーツの世界ではテレビ等のメディアにおいて、男性と女性では取り上げられる回数に差があり、女性の方が少ないことが分かります。このことから、男女ともに平等と思いついでいるものの、女性スポーツについては目にすることが少ないということに気付いていないのではないかと考えます。

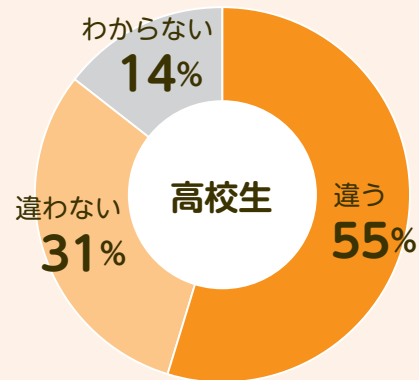
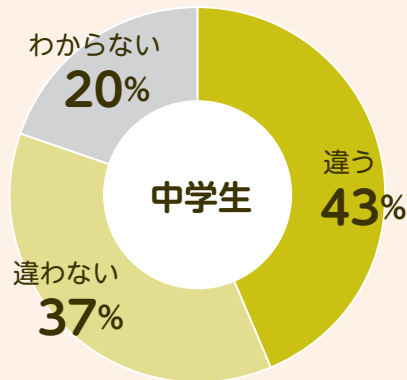
7 国際オリンピック協会 スポーツにおけるジェンダー平等、公平でインクルーシブな描写のための表象ガイドライン (<https://stillmed.olympics.com/media/Documents/Beyond-the-Games/Gender-Equality-in-Sport/IOC-Gender-Portrayal-Guidelines-JP.pdf>)

8 NHK 調査報告 テレビのジェンダーバランス (https://www.nhk.or.jp/bunken/research/domestic/pdf/20220501_7.pdf)

日常で感じている「女の子だからできること・できないこと」



性別によって「できること」が違うかについて、あなたの考えを教えてください



「女の子だから」など、性別によってできることが違うと回答した人は、中学生43%、高校生55%でした。できることが違うと答えた人の意見には、「そもそもとしての身体の構造が違うから」「思春期の男子の方が生理的に太りにくくて筋肉がつきやすいから、運動がしやすい体つきになって女子より上手になる」「体格など人それぞれで個人差はあるけれど、それでも肉体労働やスポーツでは差が出ると思う」など、身体的なことについての記述がありました。

できることが変わらないと回答した人は、中学生37%、高校生31%でした。できることが変わらないと答えた人の意見には内面的な回答が多く、一人の人間としての能力の差別や性差による機会の不平等という考えの基に回答されていました。

また特徴的だったのが、中学生と高校生では割合はあまり変わらないものの、自由記述の意見になると中学生は2件だったのに対して、高校生は71件の回答があったことです。高校生になると、さまざまな経験から自分事として考えることができ、男女の性別差を受け止めながらも、一人ひとりの人間としてジェンダー平等的な考えができるようです。





【参考資料】 ジェンダーギャップ指数比較 (2023年)

 日本 125位  イギリス 15位 (146カ国中)

	日本		イギリス		平均
	指数	順位	指数	順位	指数
経済参加	0.561	123	0.731	43	0.601
経済参加率	0.759	81	0.858	36	0.649
同一職での賃金格差	0.621	75	0.697	41	-
収入格差	0.577	100	0.619	86	0.481
管理職の男女比	0.148	133	0.583	57	0.429
専門職や技術職の男女比	-	-	0.992	68	0.71
政治参加	0.057	138	0.472	19	0.221
国会議員の男女比	0.111	131	0.527	43	-
閣僚の男女比	0.091	128	0.500	37	-
過去50年間の首相の男女比	0.000	80	0.418	9	-
教育	0.997	47	0.000	34	0.952
識字率	1.000	1	1.000	1	0.94
初等教育純就学率	1.000	1	0.998	76	-
中等教育純就学率	1.000	1	1.000	1	-
高等教育純就学率	00.976	105	1.000	1	-
総合	0.647	125	0.792	15	0.684

世界経済フォーラム発表「Global Gender Gap Report 2023」より日英を一部抜粋して比較

「調査結果から感じたこと」

調査の後、オンラインミーティング「みんなの声を届けよう！」を実施し、全国から集まったガールスカウトの女子中高生10人と意見交換の場を持ちました。調査結果から見てきたこと、自分たちの年代が置かれている現状や意識、社会課題について話し合い、どんな社会になってほしいか、どんな社会にしていきたいかを話し合いました。

このページでは、話し合いの過程で出てきた意見をご紹介します。

“学校で”

- そもそも学校で、ジェンダーに関する話を聞いたり、話したりする機会が少ない。
- SDGsの授業で、ジェンダーについて知る機会があった。
- 小学校と中学校では平等さが違う。小学校のほうが先生たちは平等に扱っていたと思う。
- 高校生になると、理系文系と別れるので、男女の環境に影響があるかもしれない。
- 中学生よりも高校生の方が、性別による不平等を感じている理由が多いのは、社会との接点が増えるからだろうか。
- ここ数年ジェンダーに対していろいろな情報を聞く機会が増えているので、改善されてきているような印象を受けた。しかし、子どもたちは教育を受ける機会があるが、大人は以前の常識から変わっていない人も多いと思う。そのためか、年代が上の先生から差別的な言葉がけなどを受けることがある。



性に関する教育は重要

教科書に大切な情報を載せることは大切だと思う。性に関する教育は、親子で話すのは恥ずかしいと感じる家庭もあり、教育を受ける環境が必要だ。

正しい情報も大切で、もっと多くの人々が正しい情報を得られたら、望まない妊娠や犯罪は減るのではないかな。

“インターネット”

- 危険だという意見が多かった一方、危険だと思っていない人もいる。
- 広告には見たくないものもたくさん表示される。
- SNSで投稿者が女性だとわかると、急に悪口をいう人が多くなる。
- 投稿する側からすると、誰が見ているかわからない。見ている人が傷つかないように投稿者は気を付けて発言しないといけない。
- インターネット上の情報を正しいものだと認識してしまうのが怖い。しかし、制限することも難しい。
- インターネットは、容姿に関する意識に与える影響が大きいし、SNSのインフルエンサーの影響力も大きい。発信を見ることで「可愛くならなきゃ」と思うこともある。容姿へのプレッシャーはメディアから受けるものが大きいと思う。無意識のうちに刷り込まれる。

“日常の性的嫌がらせ・性差別”

- 自分の身の回りにはないと思っていたけれど、他の人と話して、自分の知らなかったことは、意外と身近にあるものだと知った。
- 「性差別」や「容姿へのプレッシャー」は、結構自分の周囲でも無意識に感じていると思った。
- 実際に目の前で性差別のことを言われると、自分には無理だと自信がなくなってしまうかもしれない。

「変えたい、変わってほしいこと」

このページでは、ガールスカウトの女子中高生10人が今回の意見交換を経て思った「変えたい、変わってほしいこと」をご紹介します。

“性別に関する無意識の思い込み”

性別というフィルターを通して他者と関わるのではなく、個人を尊重することで、全ての人が自分らしく生きられる社会に近づくと分かった。今回のアンケートは女性が対象だったが、他の(男性など)人も対象にして、いろいろな視点の意見を聞いて、より一層異なる視点を持って、いままで気付かなかったことに目を向けたいと思った。理想の社会として「個人が尊重される社会」になればすべての問題が解決に向かうのではないか。

性別に関わらず一人ひとりが自分らしく生きていけるような社会を作るためには、学校でジェンダー教育をおこなうことが大切だ。

学校の授業で生涯年収の差について学んだことがあり、結婚しなくても子どもがいなくても女性の年収は男性を超えないということだった。そのとき、ジェンダーギャップの問題を理解した。

学校では、男女の校則が異なるところがまだあることを知った。例えば、性別により髪の長さや走る距離が制限されていることはおかしいと思う。男女で分けることなく、個人として尊重される社会になってほしいが、まだまだ壁がたくさんあると思う。その第一歩として男性・女性への理解が足りていないと思う。人を見るときに性別のフィルターを無意識にかけているような気がする。性別ではなく、一人ひとりに対し、適切なアプローチができるようになればいいなと思う。この考え方はLGBTQに関する理解にもつながると思う。

学校では、性的差別を受けたり不平等なことを感じたら、みんながしっかり言い合える環境を作りたい。



容姿へのプレッシャー

無意識にプレッシャーを感じていることが、自分の周囲でも結構多いということを知った。気にしないでいいことをもっと周りに広めたいと思った。理想の容姿に関する刷り込みは、小さいときからあり、その偏見を取り払うのは難しいと思うが、SNSやメディアが正しい発信の仕方をしてほしい。そうすれば劇的に人の意識は変わっていくと思う。おかしいと気付いたときに自分も周りの人に発信していく。



メディア

発信次第で良くも悪くもなるもの。毎日目にする情報や検索結果を見るのが当たり前の時代に、安心して信じられる情報であってほしい。情報が正しいものかどうか見極める力を付ける必要がある。

少女たちの声を受けて

今回の調査対象年代の少女たちの声は、年代だけで一括りにすることは難しく、住んでいる地域や生活環境により経験することや価値観にとっても差があることがわかります。例えば、痴漢被害に悩んでいる人がいる一方、痴漢被害があるということを知った人がいる、などです。学校環境による教育の差もとても大きいことがわかりました。しかし、置かれた環境を悲観するだけでなく、変えたい、変わってほしいと声をあげ行動していくという発言は、とても頼もしく「今よりももっと良い未来をつくりたい」という思いが伝わってきました。彼女たちだけでなく、大人の私たちも声をあげ行動することを忘れてはいけません。

今回の調査では、状況の変化を知るために、過去に実施した調査と同じ質問をいくつかピックアップし、調査項目に含めました。

調査結果を比較すると大きな変化はなく、いくつかの項目においては改善されていないことがわかりました。「女の子だから何かをしなくてよいと言われたことがある」という項目については、2019年より5%増加しており、「日常生活にある性的差別をどこで見るか」という質問についてはメディアが一番多く、2019年と同じ結果となりました。学校生活においても性的差別に触れる機会が多く、2019年と同様の結果となりました。また、各項目の回答において「わからない」と答えた少女も多く、特に中学生においては「気にしたことがない」「考えたことがない」という少女も多いことがわかりました。

これらの結果から、中学生はまだジェンダーに関する不平等に触れる機会が少ない事が背景にあるのではないかと考えます。しかし高校生になると、家族（特に母親）や学校でのジェンダーバイアスやジェンダーロールに触れることが多くなることで、ジェンダーに関する意識に変化が始めると考えます。家族から感じるジェンダーバイアスについては、家庭内で家事をする母親と過ごす時間が多いため、母親から「女の子だから」という理由で行動を期待されるという回答が多数あったのではないかと考えます。そして学校ではジェンダー教育や包括的性教育が進んでいるものの、教員と生徒とのコミュニケーションにおいて、教員が持つアンコンシャスバイアスやジェンダーロール等が以前と変わらず存在しているため、生徒にかける言葉や態度などにジェンダーの不平等を感じていることがわかりました。家庭内や教師の発言が、少女たちに影響を与えていることは今回の調査結果からも明らかでした。それにより少女たちは無意識に自分の限界を決めてしまう可能性があります。一人ひとりの可能性を阻まないためには、まず誰もが自分の発言を意識することが大切だと思います。

コロナ禍での影響

長いコロナ禍において、日本でもイギリスでも人と会うことができず、学校にも行けない日々が続いたことで、両国ともに少女たちの心や生活に大きな影響を与えました。不安になったり、さまざまな経験ができなくなったりと、マイナスなことが多くありました。しかし、オンラインプログラムの普及や家族との時間増、じっくりと考える時間の確保などプラスな面もありました。

ICT環境の発達により、これから世界がもっと身近に感じたり、オンライン上で経験出来たりすることが増える社会になっていくのかもしれませんが。

学校での影響

教師の声のかけ方や接し方に対して、ジェンダー平等の視点で見ることのできる高校生が増えていたり、接し方の改善が見られたりしました。しかしその反面、まだ「女の子だから」重い荷物を運ばなくて良い、進路について制限があるなどの声もありました。

過去の調査に寄せられた回答と比較した時、数値としての変化があまりなかったことは残念ですが、実際に女子中高生たちの声を聞いてみると、その回答内容には、少しではありますが変化が見られました。

ジェンダー平等に関するテーマや包括的性教育の機会を、学校教育や社会教育の中でもっと増やすことが必要です。それは少女だけでなく年齢や性別を問わず増やしていく必要があります。

相談できる環境に

性差別や暴力を見たり聞いたりしたとき、自分のカラダのことで不安や心配があるとき、「誰にも相談しない・話さない」と答えている少女たちがいることは深刻に受け止めるべきです。周りに相談できないことをインターネットやSNSで解決しようとしている少女たちがいることもわかりました。

彼女たちは、正しい情報が受け取れないかもしれないことを理解したうえで、それでもメディアを利用しているのが現状です。学校や公的機関から発信するものには正しい情報を載せてほしい、メディアリテラシーを学ぶことはとても大切だ、という声もありました。これらは社会の課題であり、改善が必要です。

おわりに

今回の調査結果では、2019年の調査時よりも状況が改善されていることを期待しましたが、大きな改善は見られず、横ばい状態であることがわかりました。変化が見られた点としては、「わからない」の回答数が減ったことです。これは、少女たちがさまざまなジェンダー差別について多くの人の発言を目にすることが増えたという社会状況の変化により、考えたことがなかった（問題があることを知らなかった）からわからないという状況から、どう思うか回答できるようになったという変化があったと考えられます。私たちガールスカウトは、少女たちが周りの意見に左右されることなく、自分自身の可能性を最大限に生かせる社会にするため、さまざまな取り組みをしています。その中でも、ジェンダー平等を実現するためのプログラムには、地域、学校、企業連携やイベントなど多様なアプローチで取り組んでいます。今回の調査を経て改めて、少女たちの可能性を伸ばすことを妨げる問題に対して声をあげ、社会に変化をもたらすことができるよう大人も一緒に学び、行動していく必要があると強く感じました。

少女の声にもあったように、このような取り組みは、少女だけのためでなく性別を問わず誰にとっても安心して生きやすく、思い描いた未来を実現することのできる社会の実現につながると考えています。

10年後、20年後、さらにジェンダー平等に近づき、誰もが性別に関係なく、自分の人生を自由に選択できる社会になるよう、みんなで考え行動していきましょう。

2024年3月

公益社団法人ガールスカウト日本連盟
SDG5推進委員会

発行：公益社団法人 ガールスカウト日本連盟

〒151-0066 東京都渋谷区西原1丁目40番3号
<https://www.girlscout.or.jp/>

この資料に関するお問い合わせ stv@girlscout.or.jp
2024年3月30日 発行
定価：1,000円+税

この報告書はマイクロン財団の
助成を受けて作成しました。

